

# 一九五〇年代六〇年代香港における文学の環境

——劉以鬯『酒徒』に見られる作家の葛藤と矛盾——

小林さつき

## 一 はじめに

香港における文学の発展に大きく寄与したものに、「南来作家」と呼ばれる大陸中国から香港に移住し、文学活動を行った作家群の存在がある。「南来作家」の香港移住は、一九三〇年代後半から五〇年代にかけて大規模に行われた。目的及び経緯はそれぞれだが、多くは政治的弾圧から逃れ、自由な執筆活動を行うためであった。移住後の活動に関しては多様である。香港という環境が、創作活動に好条件となつて働いた作家もいたが、失望の念を抱き、苦悩しながら執筆を続けていた作家も少なくない。

政党の後ろ盾があり、党の宣伝活動として作品を発表してきた作家や、五〇年代から多く見られるようになったアメリカの援助により執筆を行っていた作家<sup>(1)</sup>は、比較的恵まれた環境で創作活動を行っていた。その一方、自由な文学創作と発表の場を求めて、あるいは文筆による立身出世を夢見て香港に來たものの、自分の作品が思うように受容されず、香港の社会に対して憤然と執筆を行つてきた作家が数多くいた。

第二次世界大戦後、急激な経済発展を遂げた香港では、大衆文学の作品が流行し、いわゆる純文学の作品は市

場に活路を見出せずにいた。失意のうちにあった純文学作家は、香港は「文化砂漠」であり、純文学を受け入れる素養がないと憤嘆した。ひいては大衆文学と執拗なまでの縄張り意識をもって対立し、香港文壇の特徴ともなった「嚴肅文学」<sup>(2)</sup>と「通俗文学」、「雅」と「俗」という二項対立の構図を作り上げていった。

以前著者は、香港の文壇で「通俗文学」作家に分類された李碧華の作品に対して行われてきた評価について分析し、「嚴肅文学」により排除され周縁に位置づけられた状況に、香港という地域が周縁へと追いやられてきた構図が見られることに言及したが、<sup>(3)</sup>五〇年、六〇年代の「南来作家」の書いた文章を読むと、「嚴肅文学」作家が逆に、周縁意識を持っていたという興味深い記述が見られる。

そのような「南来作家」のひとりに劉以鬯がいる。現在では「嚴肅文学」の第一人者とされており、書店には名著と評される彼の作品が数多く並べられているが、香港に移住してきた当初は、香港社会からの疎外感にさいなまれ、理想と現実の隔たりに苦しみながら執筆活動を続けていた。

本稿では、「南来作家」の苦悩がつづられた劉以鬯の長編小説『酒徒』をとり上げ、五〇年代から六〇年代にかけての文学をとりまく状況を踏まえながら、作品に色濃く表れた当時の「南来作家」の苦悩と葛藤を考えてみたい。

## 二 「南来作家」

香港の文壇において、香港で生まれ育った作家の活躍が顕著になり始めるのは七〇年代に入ってからであった。それ以前の香港の文壇は「南来作家」により構成され、構築されていた。「南来作家」という語は、香港出身の作家を指す「本土作家」と相対的に用いられることが多く、短期長期にかかわらず、香港に滞在して文学活動を行っ

た作家を指す。

中国の作家が大陸中国を離れ、活動の地を香港に移すというのは一九三七年以前にもあった<sup>(5)</sup>。しかし、その動きは、三七年、上海が日本軍の侵略を受け抗日戦が激化すると、急激に顕著になった。戦禍を逃れ、作家のみならず多くの難民が香港に流入し、三七年の一年間で人口が八十万から百八十万へと膨れ上がった<sup>(6)</sup>。この時期移住してきた「南来作家」には蕭紅、葉靈鳳、郭沫若、茅盾、巴金、戴望舒らがいる。それらの作家により複数の新聞や文芸雑誌が創刊、復刊され、数多くの作品が発表された。この時期の「南来作家」は、香港という政治的に比較的安全な場所から大陸中国に向けて自分達の文学を発信するという形で創作活動を行っており、香港の社会に対する視点は持っていなかった。たとえば茅盾は、三八年、四一年、四六年から四九年までと数回に渡り香港に滞在し、三九年から四一年にかけて「文芸講習班」を開いて香港の青年に講義を行ったが、その目的は「抗日戦争への新たなエネルギー」を育成するためであった<sup>(7)</sup>。

一九四一年、香港が陥落すると、人口は五、六十万人にまで減少したが、戦争終結後、多くの人々が香港に戻り、四六年には人口は百六十万人に増加した。中国国内では、抗日戦終結後も政治、経済の混乱が続き、香港陥落後に大陸に戻っていた作家も、国民党の政治的弾圧から逃れるため、再び香港への避難を開始し、続々と作家の南下が行われた。この時期の代表的な「南来作家」は茅盾、郭沫若、鄭振鐸、馮乃超、夏衍などで、香港で積極的に活動を行い、文社などの組織を立ち上げるなど、香港の文人の育成にも大きく影響を及ぼした。彼らは抗日戦争期の「南来作家」に比べ、香港社会に対してより強い関心を向けていた。四八年に「南来作家」によつて組織された「中華全国文芸界抗敵協会香港分会文芸通訊部」が行つた文学作品募集は、「文学創作者に対し、現実と向き合い、香港の社会生活をテーマとして採用することを奨励する」ことが目的のひとつであった<sup>(8)</sup>。

国共内戦が激化し、共産党の勢力が全国に及ぶと、今度は共産党の弾圧から逃れて多くの作家が南下した。同時に、内戦による経済不安を避け、安定を求めて香港に移住する作家も多く見られた。一九四九年共産党政府成立後は、大陸中国に戻る作家と南下してくる作家とで、文壇では大きな入れ替わりが起こった。この時期の「南来作家」には徐訏、趙滋蕃、曹聚仁、張愛玲、李輝英、南宮搏、劉以鬯、梁羽生、金庸などがいた。この時期の「南来作家」は、それ以前とは異なり、香港を一時的な避難場所ではなく、長期的な居住地として見るようになっていた。そのため、自らの文学が香港の社会に受け入れられないことに対して不満も募っていったのではないだろうか。

盧瑋鑾は「南来作家」の特徴について、「三、四、五〇年代から八〇年代と、時期にかかわらず、大陸から香港に移住してきた文化人には、都落ちの無念さがある。彼らは主流文化の場所から外国人が統治する小さな島にやってきて、何につけても比較をし、何もかもが気に入らない。言語、社会の風習から、思想、価値観まで全てが異なる。……疎外感や封印された寂寥感、いかんともしがたい苦悶を抱えることになった。この強烈な抑圧感はい、五〇年代に南下した右派の作家において最も深刻であった。彼らは弾圧を受けて故郷を逃れ、その上経済的困窮、生活の困難が待ち受けていた。……七、八〇年代の南来作家はそのような抑圧感は薄く、適応力も増していた。」<sup>(9)</sup>

劉以鬯はまさに四、五〇年代に香港に南下した、苦悩と抑圧感を経験した作家であった。

### 三 劉以鬯について

一九一八年上海に生まれる。高校時代から執筆活動を始め、上海の聖約翰大学 (St. John's University) に入学し

て哲学を専攻した。一九四一年に大学を卒業した後、重慶で新聞『掃蕩報』や『国民公報』の文芸欄編集などの仕事をする。四五年、上海に戻り、五四新文学の優れた作品を出版するため「懷正文化社」を設立。姚雪垠、施蟄存らの作品を出版した。内戦による混乱で、出版した書籍の販売代金の回収もできず、更にはインフレによって経営が立ち行かなくなる。四八年、治安悪化の一途をたどる上海を離れ、香港へ移住。香港の地で「新しくやり直そうと思つたが、香港の状況を理解するにつれ、香港で文学活動を行うのは非常に困難だとわかつた。」と述べている通り、移住後間もなく経済的に困窮し、生計を立てるために『星島晩報』にいわゆる「通俗文学」作品の連載を始めた。一九五一年、『星島週報』の編集と雑誌『西點』の編集主幹に就任。短編小説集『天堂与地獄』を發行。新聞社からの招聘を受けて、五二年にはシンガポール、五四年にはクアラルンプールに赴き、文芸欄編集の仕事を行った。五七年に香港に戻り、『香港時報』の文芸刊『浅水湾』の編集の仕事を行いながら小説や文学評論を発表し、多くの単行本が出版された。劉はこの時期を振り返り、『粗悪品』を大量生産した。一日一万字近くも書くことがあつた。何紙かの新聞に連載小説を書く以外にも、多くの『三文小説』を書いた。<sup>(11)</sup>と云っている。しかし、純文学作家としての評価は高く、一九八三年香港作家聯会創設以来、副会長、会長を歴任し、香港における純文学を代表する雑誌『香港文学』<sup>(12)</sup>の編集長を一九八五年から長期にわたり務めた。二〇〇一年には香港政府から文学の発展への功勞を認められ榮譽勳章を授与された。

#### 四 『酒徒』の苦惱

劉以鬯の代表作である『酒徒』は、一九六二年十月十八日から六三年三月三十日まで『星島日報』に連載された。六三年十月に単行本として出版されたが、初版が完売されても再版されることはなかつた。台湾では、七九

年に遠景出版より台湾版が出版され、数次にわたり版が重ねられた。大陸中国でも、改革開放政策によって香港の作品が多く紹介されるようになり、八五年には大陸版が出版され、出版部数は八万冊を超えている。香港では、市場での受容こそ大きくはなかったが、八〇年代初期から多数の書評や論文が出され、それらは一様に、「意識の流れ」という新たな手法を用いて、香港社会を描き出した苦悩に満ちた「嚴肅文学」の名作であるという高い評価を与えている。<sup>(13)</sup>そして、連載が終わってから三十年後の九三年、絶版となっていた『酒徒』がようやく再版された。九五年、九七年にはテレビドラマに改編され、小説、テレビドラマともに優れた作品として賞を受けている。<sup>(14)</sup>

王一桃は『酒徒』の再版にあたって書いた文章の中で、『酒徒』の再版が人々に与えた鼓舞は実に大きい。この嚴肅文学の代表的な作品は、三十年経ってようやく再版され、『香港版』『台湾版』『大陸版』が揃った。一人からの悪意に満ちた攻撃『香港の嚴肅文学はすでに寿命が尽きた』というのは事実ではなかった。これ以上に喜ばしいニュースがあるだろうか<sup>(15)</sup>と賞賛し、潘亞暉、江義生は「劉以鬯論」において、劉以鬯の代表作である『酒徒』は、中国初の意識流長編小説であり、香港文学史上、発展の道標となる傑作である、としている。<sup>(16)</sup>

『酒徒』は、全て一人称「私」の語りによって展開していく。香港で物書きをして生計を立てている「私」の生活とそれをとりまく人々が「私」の視点から描かれていく。

上海で生まれ育った「私」は十四歳から執筆活動を始め、重慶で新聞の文芸欄の編集の仕事についたが、文筆業の発展の地を求め、香港へと移住する。純文学を志しながらも、思うようにいかず、小さな部屋を間借りしながら、毎日二社の新聞に武侠小说の連載を書いて生計を立てている。生活費にも事欠く毎日だが、自分自身の文学に対する理想と、香港における文学の現実との大きな隔たりに失望し、酒におぼれる日々を送っている。純文

学への情熱に燃える香港人青年、麦荷門から純文学雑誌『前衛文学』創刊の誘いを受け、「三文小説は、稲田の害虫と同じだ。(その雑誌は) DDTのように全ての害虫を殺すことはできないが、新たな芽を守ることはできる。」<sup>(17)</sup>と純文学を広めようと情熱を再燃させる。しかし突如、全てが無意味に思え、放棄してしまう。その後、さらに酒量は増え、直視しがたい現実からの逃避のため、酒におぼれていく。そのような生活の中、下宿先の十七才の娘や女主人に次々と誘惑され、理性を捨てきれない「私」は仕方なく転居を繰り返し、財政をさらに圧迫する。映画の脚本執筆の依頼を受け、新たなジャンルへの挑戦に意欲的に取り組むが、その脚本も採用されず、後に不採用だったはずの脚本が盗用されていることに気づき「人が人を食らう社会だ」と商業化社会の弊害に嫌悪感を増幅させる。唯一の収入源だった武侠小说の連載が打ち切られ、収入の無くなった「私」はついに官能小説の執筆を始める。初めて手掛けた官能小説『下宿屋の女主人、藩金蓮』がヒットし、次々に執筆依頼が舞い込み、初めて経済的に余裕のある日々が訪れるが、葛藤にさいなまれ、酒に逃げる日々が続く。そして理性も失い始め、十七才のダンサーにのめりこみ、醜態を演じる。しばらくすると「私」の官能小説も読者から飽きられ、連載を打ち切られてしまう。「私は、低能な人間だ。この現実に対応することができない。……これからどうしたらいいのか。……考える勇氣もない。もう手元には十五元しかない。……生き続けていくことに何の意義があるのかわからない。死にたい。」<sup>(18)</sup>と服毒自殺を図るが、間借りしていた家主の老婦人に助けられる。老婦人の温かい心によれ、酒を断って生活を立て直していく決意をするが、それも長くは続かない。泥酔した際に、老婦人の心を大きく傷つけ、自殺へと追いやってしまう。その衝撃から今度こそはと断酒を誓うが、その日の夜には酒を求めて香港の街へとさまよい出て行く。

『酒徒』の中では全編にわたり、題名通り酒飲みの「私」の内的独白という形をとって、文学の理想、香港社会

に対する数々の不満、批判が語られる。所々に、対象のはっきりしない思考や記憶などが無秩序に並べられ、連続性のない「意識の流れ」が描かれている。

作品の中では「酒」が大きな働きを持っており、辛い現実を忘れさせる一種の鎮痛剤として機能している。「酒はよくない。でも飲まずにはいられない。酒を飲まなければ現実には百人の老婆のように四六時中耳元で騒ぎ続ける。現実はこの世で最も醜悪なものだ。」「北からの旅客として」「単身でこの小さな島（香港）に寄生している」私は「酒鬼と成り果てて、現実から逃避しようとしても、やはり現実に直面しなければならぬ<sup>(19)</sup>。」

そして「酒」は思考の潤滑油としても機能している。酒を飲んでいない時は、文学に対しての思考は停止している。麦荷門に文学についての意見を求められても「そんな問題は頭が痛くなる。女の話でもしよう」と拒否する。しかし、「酒を飲んだら、次第に度胸がすわってきた」と、「酒」という潤滑油によって、饒舌に文学への理想、文学の抱える問題について語り始める。<sup>(20)</sup>「私」にとって、香港で文学活動を行っていく上で直面しなければならぬ現実とは、頭痛のように思考を阻害し、鎮痛剤である「酒」によって思考の機能が回復するとも言えるかもしれない。辛い現実と直面し、文学の理想と純文学と「雅」と、通俗文学と「俗」との間を揺れ動き、一方では、複雑な人間の思考というものを「意識の流れ」と「酒」を用いて描き出している。<sup>(21)</sup>

しかし、その思考の潤滑油、鎮痛剤も過多になると、中毒症状を起こし、次第に常軌を逸し始める。生活に窮しながら、わずかな原稿料も酒代に消え、酒のために官能小説まで手がけるようになり、文学の理想を捨てていく。最後には仕事も金も失い、絶望の果てに身を置きながらも酒の誘惑から逃れることができない。

劉以鬯の経歴や香港移住当時の環境は、「私」に酷似している。彼が一九八五年に行った「香港文学研討会」での講演<sup>(22)</sup>で述べた文学観、香港の文学環境に対する批判も、「私」が語るそれと重なる。



（「五〇年代には、）一般読者の興味は低俗な官能小説や芸術的価値のない『新鴛鴦小説』や『新武俠小説』へと移り、作家の生活は、市場の要求に迎合せざるを得ず、墮落の傾向が顕著になった。」「五〇年代初期、……逆境の中にいた作家たちは野心と決心を失い、ハナズオウ（香港市の花）の棘に刺されて傷を負い、容易に失敗主義者へと変化していった。」

『酒徒』の「私」を酒におぼれさせ、劉以鬯を「失敗主義者」たらしめた、それほどまでに耐え難い、辛い現実とは一体どのようなものなのであろうか。

## 五 「嚴肅文学」と「通俗文学」

「私」が耐え難い現実として捉えていたことは、文学青年の麦荷門から投げかけられた、「香港ではなぜ『戦争と平和』のような大作が生まれないのか」という問いの答えとして列挙された以下の八点に端的に表れている。

①作家の生活が不安定であること②一般読者の鑑賞レベルが低いこと③政府が作家の權益を保障する方策を打ち出さないこと④違法な盗作販売が横行し、作家が艱難な仕事に挑もうとしなくなってしまうこと⑤先見の明をもつた出版社が少ないこと⑥客観的な奨励性の欠如⑦真正銘の書評家がいらないこと⑧原稿料と印税が低すぎる<sup>(23)</sup>こと。

以上のような批判、不満が全編にわたり、繰り返し述べられている。その中でも、最も強く表されているのは、読者に対する不満である。

（この二つの武俠小説は書き始めてからすでに一年になる。生活のため、自分の才知を放棄してこんな文章を書くなんておかしなことだ。もっとおかしなのは、読者が好んで作者の想像とともに曖昧で縹渺たる世界に

漂っていることだ。) 笑いがこみ上げてきた。酒瓶の蓋を開けて一杯注いだ。<sup>(24)</sup>  
その後も痛烈な読者批判は続く。

ここ数十年來、短編小説の収穫が少ないわけではなかった。しかし、……(作品を出版しても)一、二千冊で絶版になってしまふ。読者の作者に対する励ましの欠如は、偉大な作品の誕生を阻止するばかりか比較的優れた作品の普及と保存にも影響を及ぼす。<sup>(25)</sup>

そして、それら読者及び出版社への不満はすべて、香港の商業化社会への不満となって爆発する。

ここは自由な世界だ。作家には武俠小説や三文小説を書く自由がある。読者にも武俠小説や三文小説を読む自由がある。しかし、そんな自由は本当に必要なものであろうか。思うにこれは不健康な自由である。社会の基盤を蝕む危険がある。<sup>(26)</sup>

『前衛文学』発行作業に取り組み、純文学の行く末に思いを馳せている時、ふと、絶望感に支配される。「ああ、こんなこと、考えるのはよそう。香港は商業化社会だ。このような問題に関心をよせるのは馬鹿だけだ。」「酒が飲みたい。現実は醜悪だ。」「この社会は完全に善悪の判断基準を失っている。」<sup>(27)</sup>

この香港社会に対する不満、如何ともしがたい絶望感の中には、辛い現実Ⅱ香港という商業化社会Ⅱ商業化社会に毒された人々(香港の読者、脚本を盗作した友人、「私」を誘惑する下宿先の娘、女主人、十七才のダンサー)Ⅱ「俗」Ⅱ通俗文学Ⅱ「悪」、そして、文学の理想Ⅱ麦荷門からの励ましⅡ『前衛文学』Ⅱ「雅」Ⅱ純文学Ⅱ「善」という二項対立の構図が打ち立てられている。そしてそれは、香港の文壇における「厳肅文学」と「通俗文学」の二項対立の構図へと繋がっていく。

香港の文壇では長く、「通俗文学」と「厳肅文学」という明確な分類が行われ、「商業的価値を持った」「低俗

な<sup>(28)</sup>「通俗文学」作品による、「五四新文学以降の優れた作品の流れを汲む」「芸術性をもった<sup>(29)</sup>」「厳粛文学」の発展を阻害する弊害が盛んに訴えられてきた。九〇年代に入り、「通俗文学」「流行文学」への再評価を行う論述が見られるようになったが、それ以前は、強い縄張り意識で、「通俗文学」の作品を評価の場から排除してきた。そのような明確かつ単純な二項対立が『酒徒』の中の「南来作家」の苦悩と不満の中にも見ることが出来る。

## 六 作家としての葛藤と矛盾

劉以鬯が香港に移住してきた一九四八年から『酒徒』が書かれた六二年は、香港経済が急激な発展を遂げた時期であると同時に、作家の明暗が大きく別れた時期でもある。五〇年代の文壇は、様々なスタイルの大衆文学が生まれ、「鴛鴦胡蝶派」の作品や金庸、梁羽生による「武侠小说」が大流行し、それら人気作家は文筆により財をなした。

しかし、純文学を志した作家の状況は苦しかった。陶傑は「一日四千字を書かなければ生活していけなかった。」と当時を回想して語っており、西西は「二年の印税は大学講師としての一週間の収入に等しい」と述べている。<sup>(30)</sup> 経済的困窮による苦悩と読者への批判は劉以鬯自身の発言の中にも見られる。趙稀方は『小説香港』の中で、「作家の社会的責任」の座談会で行われた劉以鬯の発言「作家は社会に対して責任はあるが、社会も作家に対して責任があるのではないか?」「確かに、社会が作家に対して、真剣かつ厳粛に創作に向き合い、社会の発展を促し、教育意義があり、優良な意識と芸術性のある優れた作品を要求するのは分かる。道義上、作家もこの歴史的社会的使命に答えねばならない。しかし、社会が作家に対して何らかの責任を果たしたことがあったか。一人の作家が困窮した時、誰が彼の心配をしてくれるであろう?」をとりあげ、その多くが生活のために複数の職業を持ち

ながら執筆活動を行うという、経済的な苦境に置かれていた香港の純文学作家ならではの言葉だとしている。<sup>(31)</sup>

しかし、いわゆる「純文学」を志す作家が経済的に社会から冷遇されていたのは何も香港に限ったことではない。清貧を貫いて一生を創作活動に費やした著名な作家は、どの地域にも、どの時代にもいた。「酒徒」の「私」が、読者からの奨励がないために、理想とする作品を書くことができない、という哀れむべき状況を切々と語っていることには大きな矛盾が存在する。

『酒徒』における自尊心の喪失と回復にも、その矛盾の一端がのぞいている。心ならずも続けていた「芸術的価値のない」武侠小说の連載打ち切りの知らせが新聞社から届く。「私は完全に収入がなくなってしまった。私の自尊心は傷つけられた。」そして、凶らずも「社会に害を及ぼす」官能小説がヒットし、他の新聞社からも続々と良い条件で連載の依頼がくる。「私の自尊心は回復した。しかし、悲しかった。」<sup>(32)</sup>

純文学作家や研究者が大いなる共感を抱いた『酒徒』の中で描かれた香港社会の辛い現実、滔滔と綴られた「私」の哀れむべき憤懣と苦悶、読者及び香港社会への一方的な批判と叱責の中に潜んでいる矛盾とは、一方では嫌悪感を露にしている商業化社会に、自らも無意識のうちに組み込まれ、完全否定している商業化社会の価値観を気づかぬうちに持たされていくことにある。欠如していると痛烈に読者を批判している「作家に対する奨励」も「作家に対する責任」も、香港の読者に受け入れられていないとする判断基準も、すべて「私」が忌み嫌っている商業化社会の金銭的価値基準によるものなのである。

## 七 まとめ

也斯は「在香港写小説」の中で以下のように述べている。<sup>(33)</sup>

香港において、厳肅な文学創作は社会文化の主流になったことはなかった。主流の思考と態度の外で、「周縁」の思考と態度を示しただけであった。……五〇年代以来、文芸刊行物は無数に発行されたが寿命は短かった。それに反して娯楽性刊行物は長く持続し、影響力も甚大であった。厳肅文芸作品は計算高く通俗的刊行物に寄生し、社会の主流意識とからみあい進退をともししていた。

趙稀方は『小説香港』で、上海と香港を比較し、上海の作家は原稿料という報酬以外にも名誉を得、名声を上げるといふ目的意識を持って創作活動をしていたが、香港の作家は完全に報酬を得ることのみを目的としていたとし、上海においても通俗文学の作品に対する消費は大きかったが、香港のように厳肅文学を追いやって、文壇の主流になるということはなかった、と述べている。<sup>(34)</sup>

商業化社会の香港において、特に経済成長の著しかった五〇年代の香港にあつて、目に見える評価としての金銭的な処遇が得られなかった「南来作家」の「厳肅文学」作家にとって、一般読者から目に見える形で受容されていた「通俗文学」作家に対し、無意識のうちに「周縁」意識を抱くのも理解できる。大陸中国の純文学という主流意識を持って中国の「周縁」地域である香港に移住し、自らの文学に自負を持ちながらも、読者及び社会から冷遇され、強い疎外感を味わった。それに対する危機感によつて、自らの「厳肅文学」が主流であるという主張を繰り返し、社会で主流となりつつあった「通俗文学」の文学的価値を否定し、「周縁」へと追いやることによつて、自らの存在意義を確保しようとした。「厳肅文学」「通俗文学」という明確な区画と強い縄張り意識は、『酒徒』に表れているような、恵まれない文学環境にいた純文学作家の自我の主張から生まれてきたものなのである。

そのような「厳肅文学」作家である「南来作家」にとつて、酒飲みの「私」が果たした代弁者としての役割は、

大きな慰めになったに違いない。

注

- (1) アメリカの支援により創作された文学は「緑背文学」や「美元文学」と称され、朝鮮戦争勃発とともに、冷戦状況が深刻化すると、アメリカ政府は共産主義への防波堤を香港に築くため、出版社を全面支援して文学雑誌『人文学』『中国学生週報』等を発行した。盧瑋鑾「香港文学研究的幾個問題」(『香港故事』牛津大学出版社 一九九六年)によると、その原稿料は高く、出版物は安価で、他の出版活動を阻害したという。
- (2) 「嚴肅文学」という語が使われ始めた時期は明確ではないが、純文学とほぼ同義として用いられている。袁良駿は『香港小説史』で、ここまで激しい「嚴肅文学」と「通俗文学」という対立は大陸中国、台湾でも見られないことだと述べている。(袁良駿『香港小説史』第一巻 海天出版社 一九九九年)
- (3) 「記録される歴史と記憶される歴史—李碧華『胭脂扣』の中の香港」『お茶の水女子大学中国文学会報』第二十二号 二〇〇三年四月
- (4) 香港市政局の第一回「作家駐留計画」の顧問や、数々の文学賞の審査員を務めるなど、純文学推進のため力を注いでいる。
- (5) たとえば、一九三五年、許地山は香港大学からの招聘を受け、教授として教壇に立った。
- (6) 人口の数字は全て『香港史新編』より引用。(王廣武『香港史新編』三聯書店 一九九七年)
- (7) 犁青「從『南來作家』到『香港作家』」『從回到南下香港——南來作家座談會文集』嶺南學院現代中文文學研究中心 一九九五年
- (8) 同(7)
- (9) 盧瑋鑾「南來作家淺說」一九九三年『香港故事』牛津大学出版社 一九九六年
- (10) 「劉以鬯訪問記」『星海』(『新晚報』週刊文芸誌) 一九八一年七月二十八日

- (11) 同 (10)
- (12) 一九八五年に創刊され、二〇〇五年現在も「嚴肅文学」の方針を保っている文芸雑誌。短命な雑誌が多い中、純文学の雑誌でこれだけ長期にわたって発行されているものは非常に珍しい。
- (13) 『酒徒』評論選集（獲益出版 一九九五年）には、八十年代から九十年代に出された評論、論文が多数収録されている。
- (14) 一九九八年『巫州週刊』主催の「二十世紀中文小説ベスト一〇〇」で入選。二〇〇〇年『香港筆蒼』主催「二十世紀香港小説經典名著ベスト一〇〇」第三位に選ばれた。テレビドラマは「第三十四回シカゴ国際テレビジョンフェスティバル」の銀賞を受賞。
- (15) 「從『酒徒』重印想到嚴肅文学的命運」『星島日報』一九九三年六月八日
- (16) 潘亞暉、江義生「劉以鬯論」『暨南學報』一九八八年第一期
- (17) 『酒徒』百二十七ページ 獲益出版事業有限公司 二〇〇三年七月改訂版
- (18) 同 (17) 二百七十二ページ
- (19) 同 (17) 二十八ページ
- (20) 同 (17) 四十一、四十二ページ
- (21) 董啓章は「城市的現實經驗与文本經驗」の中で、『酒徒』は、「酒」の作用を用いて、「理性」と「非理性」の間を往来する「意識の流れ」を合理化しており、醒と酔、理性と非理性の矛盾と対立という香港の分裂した社会を描き出していると分析している。李今も一九九三年『文匯報』の『酒徒』書評で、「私」の醒と酔、現実と夢幻の循環形式でストーリーが展開していくと述べている。
- (22) 一九八五年四月二十七日に行われた講演は、同年七月に「五〇年代初期的香港文学」というタイトルで論文として書き直され、『香港文学深賞』（陳炳良編 一九九一年十二月 三聯書店）に収録されている。
- (23) 同 (17) 四十五ページ
- (24) 同 (17) 二十四ページ

- (25) 同(17) 四十二ページ
- (26) 同(17) 八十九ページ
- (27) 同(17) 百六十六、百六十七ページ
- (28) 王一桃「香港『嚴肅』文学的困境與出路」(『香港文学』第一〇四、一〇五期 一九九三年)等、その他の論述、批評でも多くの類似した記述が見られる。
- (29) 許子東「香港的純文学與流行文学」『第三屆香港文学節研討會議稿彙編』市政局公共圖書館 一九九九年
- (30) 袁良駿『香港小説史』第一卷 海天出版社 一九九九年より引用
- (31) 趙稀方『小説香港』三聯書店 二〇〇三年
- (32) 同(17) 二百二ページ
- (33) 也斯「在香港写小説」『香港文学』第七十七期
- (34) 同(31)